



二十六歳・ 恥悦の人妻女教師

草飼晃
挿絵／GADEN

立ち読み版

KTC
KILL TIME COMMUNICATION

第一章	人妻美貴子の受難・人質は弟	4
第二章	学園で待ち受けるあらたな飢狼	43
第三章	甘美すぎる筆拷問と二十六歳の絶頂	85
第四章	貞操の剥奪・落花陵辱	124
第五章	魔悦の目覚め・ついに弟からも	162
第六章	夜に人妻は輝く・晩秋の饗宴	205

登場人物

Characters

桜木 美貴子

(さくらぎ みきこ)

結婚二年目の人妻にして都内高校の女教師。教師らしく正義感が強く、曲がったことがきらい。

橋本 達之

(はしもと たつゆき)

美貴子の弟で、十六歳の高校一年生。気が弱く昔から姉を頼り、想い慕ってきた。

加藤 正蔵

(かとう しょうぞう)

不動産屋。高校のPTA役員で、美貴子と同じ町内に住んでいる商店街のまとめ役。

森田 泰次

(もりた たいじ)

正蔵の知人の文房具店店主。高校の購買に文具を卸しており、以前から美貴子とは顔見知り。

加藤 克則

(かとう かつのり)

正蔵の息子で、美貴子の勤務する学園の生徒。



誰にも知られないということだ。

瞳に決意の光をたたえて、美貴子は小さくくちびるを開いた。

「達之ちゃん、だいじょうぶだからね。すぐにお家に帰れるわ。だから、お姉さんの方は見ないでいてね。できれば眼を閉じていなさいね」

そう告げてから初めてまっすぐ肥満中年の野太いペニスに向きあった。

怒りのこもった眼でその持ち主の脂ぎった顔を見上げる。

「なんだ、その恨みがましい眼つきは？　まるでわしが悪者みたいじゃないか。たかがフェラひとつできないばかりに弟さんにつらい思いをさせているのは奥さんの方なのになあ。さあ。奥さん。さっさとやるのか、やらないのか」

「し、します」

美貴子は答えた。

「それならやりなさい。ほら早く、奥さん！」

（あ、あなたを裏切るわけではないんです……しかたがないことなんです。だから、許してください）

海外出張中の夫にこころの中で詫びてから、二十六歳の人妻教師はゆっくりと男根の先端に桜の花びら色のくちびるを近づけていく。剛直はやはり強烈な牡臭を放って

いた。数センチの距離になっただけで鼻の根元が痺れるようなツンとした刺激に見舞われる。美麗な細い眉を逆のハの字形にゆがませたまま、すぼめた上くちびると下くちびるの間でそつと亀頭の先を含んだ。

その瞬間。

（あ、いやっ……）

くちびるの敏感な神経が熱を含んだ亀頭から思いもかけない刺激を受けて、美貴子はビクンとその腰を浮かしかけた。舌から首すじをつたわって乳房の奥に流れこんでくるような感覚。強引に含まされた先ほどは気がつかなかったピリピリとしたもの。自分のくちびるがこれほどまでに敏感なのだということも、夫とのキスからしばらく遠ざかっている人妻は忘れていたのだ。

「なにを休んだるか。始めたばかりじゃないか。口に入れてるだけじゃしょうがないだろう。舌を使うんだよ。やってみなさい」

（な、なんていういやな男なの……）

それでも従うよりほかなかった。くちびるを開いて亀頭を少し抜き出させぎみにさせてから、おそろおそろ舌先を伸ばして触れさせる。自分の歯茎の内がわの敏感なところにはなるべく刺激を与えないように気をつけながら。

舌先が当たった瞬間、屹立の先端は人妻のキスに応えるかのように身ぶるいをした。不動産屋の口からも小さな声で、おっ、という声が洩れた。

いったんそのまま口から抜き出させ、頬にふりかかっていた艶髪を細指で梳きあげてから、豊かな隆起をその衣服の下に隠し持った聖職の人妻は相手の肉棒の幹に舌を這わせにかかった。あたたかい唾液に濡れた舌粘膜で亀頭のカーブの弾力を確かめ、エラでいったん止まって左右にちろちろと刺激を与えてから胴体へと移っていく。

「な、なんだよ奥さん……う、うまいじゃないか」

不動産屋の声はうわずついていた。

しかし美貴子は誰かに教わったことがあるわけではなかった。今の髪をかきあげる仕草にしても同じ。ただ男の愛情を受け入れ受胎する準備の整った大人の女としての本能みたいなものにつき動かされているだけだった。いやいや命令に従って口や舌を使っているだけなのに、好色そうな肥満中年はどうやら不満を感じてはいないようだった。

「や、やつぱり今どきの人妻は違うな……亭主に仕込まれたか？ いや、テクニクとかじゃないな、こりゃ。ムッチリした普段着姿のまま他人の嫁にしやぶらせてるからよけい気持ちよく感じるんだわい。うへへへ。たまんねえな、こりゃ」

(なによこの人。調子に乗って……ッ)

噛んでやろうか。そんな思いが脳裏をよぎったが。

(だめだわ)

弟がなにをされるかわからない。

と、そのときだった。腰の奥の方でなにかがピリッと一回鈍く疼いた。これまでの人生で経験したことのないような疼きだった。一回だけではおさまらずにすぐに二度目が来た。今度は疼きはやや持続性のあるヒリヒリとした刺激となってスカートの下——左右に豊かに漲った腰骨から骨盤にかけてを痺れさせた。

(あ。な、なに……?)

生理が急に始まってしまったのか。

いや違う、と思った。似ているが違うと。

「どうした、奥さん。うへへ。なんか耳たぶや首すじのあたりが赤くなってきたんじゃないのか？ ええ？ そんなにわしのせがれが美味いか？ さあ、胴体はそんなところでもないから、もう一回ぱっくり啜えるんだ」

とまどう人妻教師へ肥満中年はホクホクした顔になって声をかけてくる。

「——あむ」

身体の芯のくすぶりに後押しされるように、知的さとあたたかさを併せ持った人妻教師はそのふつくらとしたくちびるを亀頭にかぶせた。命じられる通り咥えたままで舌をぺたりと押しあててねぶりあげる。数回それをくりかえさせられただけで美貴子の息は荒くなってきた。それでも肥満中年は弟さんがどうなってもいいのかと脅して行為をつづけさせようとする。

姉さん、ぼくなんかのためにそんなことしないでよ、と弟が弱々しい声で訴えているのが耳に刺さってきた。

（あの子ったら。眼をつぶっていてと言ったはずなのに！）

だが額にうつすらと汗が浮き始めたのは大切な年下の肉親に見られているという羞恥のせいばかりではなかった。残暑のせいばかりでもなかった。息苦しさのせいだけでもなかった。夫が不在のためこの三か月の間愛情の確認から遠ざかっている二十代後半の熟れた人妻の肉体は、夫のものよりも巨きく硬い男根を口内に含んだことだけで緩やかな上向きの曲線を描いて反応を示し始めていた。

（こ、この匂い）

やさしいだけの夫の身体からは感じとることのできない濃い性臭を美貴子は鼻孔いっぱいに吸いこんでいた。身体じゅうの毛穴という毛穴から皮脂とともに滲み出して



いるようなこの男くささ。最初の衝撃や嫌悪感が薄れて少しだけ馴れてしまえばそれはなんだか女性の卵巣の芯をちくちくと刺激してくるような独特な匂いだった。ある種の甘美ささえ含んでいる。また一度ぴりりと蜜腰の底あたりに痺れが走った。はつきりとした鋭さをともなった痺れが。

(ん……ッ)

それに後押しされるように、美貴子の奉仕にはにわかに熱が入っていった。意志とは離れたところにある別のところからの行為だった。気持ちではもちろんまだ歯を立ててやりたいと思っている。だがやわらかくてあたたかい濡れた舌はなかば勝手に動き出していった。男の欲望を迎え入れ、射精を促すかのようにねつとりとまといつき、擦りあげる。

と。

カシヤリ、という音が聞こえた。

「ククク、桜木さんの奥さん。いい顔ですよ。鼻をひくひくさせてフンフン空気を洩らしながら——とても強制されていやいやしているようには見えませんかえ」

(な、なにを……?)

口から肉棒を出してなにをしているんですかと訴えようとしたが、その肩を不動産

屋におさえこまれて美貴子は姿勢を変えることができない。すると二度、三度とたてつづけてカシャリ、カシャリと携帯のシャッター音が聞こえてくる。

（い、いや！ こんなことをしているところを写真になんか撮られたら！）

そのときだった。

（え……あつ）

偶然菌茎の根元はやや硬くなった部分が触れたことで、五十代の男の亀頭粘膜は体積と張りをいっそう増して口の中でビクッとふるえた。それが美貴子の菌茎の内がわと舌先にも刺激となつてつたわつてきた。

（あ、あ。あ）

肉の幹を含んだまま反射的に美貴子は頬をへこませてもぐもぐと口腔粘膜で摩擦を加えていた。ざらついた亀頭冠の感触がさらなる愉悅を二十六歳の腰に送りこんでくる。それに呼応するみたいに肉凶器はぐぐぐつとこわばりを増した。

溜まつてきた唾液をどうしていいかわからず、口からこぼすこともなんだか恥ずかしく、もちろん飲みこむ気にはなれずに——美貴子はねつとりとした先走り汁らしきものといっしょに舌で肉棒の腹に向かって唾液をからみつかせた。

「こ、こりやたまらん。奥さんのつるつるした菌茎とそのあつたかい舌……だ、出し

ちまいそうだ」

だが結局持ちこたえたらしく今度は口に含ませたままでいっそう腰を前に突き出し、肥満体の不動産屋は人妻の艶やかな髪を撫でまわし始めた。指にからめ、梳き、鼻を寄せてくんくんと匂いを嗅ぐ。

「なあ、いい匂いの奥さん。今度わしといっしょに駅前のカラオケに行つてデュエットしようぜ。いいだろ？ わしがマイクを握つてる間は奥さんはわしのせがれを握つていればいい。それとも歌にあわせて今みたいに尺八を吹くか？ うえっへへへ」

（い、いやっ、勝手にわ、わたしの髪にさわらないでくださいっ）
こんな男なんかにはさわられたくはない。

口から肉棒を吐き出させようとしても肥満中年はそれを許さない。乱暴に髪束を掴んで引っ張りながら、もう片方の手で抗おうとする美貴子の手首をおさえこむ。腰を前後に荒っぽく振りたてて二十六歳の小さな口の奥にまで呑みこませようとしてくる。口内粘膜いっぱいに感じる太い男根の精気を漲らせた逞しさに美貴子の舌はなかば勝手に動いてからみついてた。白かった美貴子の頬も目元もほんのりと赤らんできた。ふぐ、ふぐ、ふうむ、というなまめかしい声が喉から溢れ出る。それをシャッター音

が追いかけてくる。

(いやいやっ、だから写さないでっ！)

「おらおら」

不動産屋は美貴子の髪とあごをつまみ持って勝手に前後に動かし始めた。口いっぱいに頬張らされたままの強引なイラマチオで息が苦しくなる。忍びこんできた唾液だか汁だかわからないものが鼻孔を詰まらせてしまっているのだ。つらかった。しかし美貴子よりふたつ年上だけの夫とは違う強靱な男根に対してショーツの股布の底の内がわから腰の芯にかけてはジンジンと熱くなっていた。

(ああいやっ、わたし、こんなの、いや……っ)

突然だった。

ひざまず

跪かせた人妻の口をステテコ姿になって犯していた不動産屋に頂点が訪れた。

(げ、げふッ……！)

宣言も予告もない放精だった。

口中ばかりか舌の根元から喉に向かってひりつとした苦みがひろがる。

しかし不動産屋は人妻の髪を掴み、おさえこんだままでなかなか離そうとはしない。逞しい怒張をなおも数回びゅくびゅくと振動させながら断続的におッおッと短いうな

り声を発して人妻の口中を濁汁で満たしていく。苦しさど苦さに美貴子が涙をこぼしたところになってようやく牡獣は、ふうーと長く息を吐きながら男根を引き抜いてくれた。

まだ人妻は口の中に溜めこんだままだった。腐った植物のような青臭さに粘り気と酸味が混ざったどろどろのものが口腔を満たしている。その汁の烏賊いかにも栗花にも似ているツンとした独特の匂いが眼の粘膜をひりひりと刺激してきた。

「奥さん、呑みなさい。女としての当然のたしなみだろ。うへへ」

そんなことは無理だった。

「けほっ……けほッ」

中年男の体温をともなったその粘汁すべてを雑草混じりの地面の上にこぼしてもまだ、口腔のそここや菌茎と菌の間に重くからみついている感じだった。

(こ……こんなひどいこと)

信じられなかった。人間のすることではないと思った。

「なんだよ奥さん。ああ、もったいない。ぜんぶ戻しちゃったのか？」

眉をつりあげたパンチパーマの不動産屋は、清廉な人妻の髪を掴んで手を上げようとしたが――。

「うえっへへ……奥さんのオマ○コ、こんなにきれいだったんだな。知らなかったぜ。期待はしてたけどな。まさかここまでとは」

どれどれと文房具屋も覗きこんできた。

(い、いやッ)

高い知性と豊かな肢体を持った人妻教師の眉根がぎゅつとゆがんだ。

こんな男たちなんかに見られたくない……ッ。

恥ずかしすぎる。夫にだって注視されたくはないところ。色も匂いもかたちも自分だけがふつうとは違っていておかしいのではと美貴子はひそかに悩むことがあった。賛嘆する不動産屋の気持ちか美貴子にはわからない。しかし視線ははっきりと痛みをおぼえるほどに突き刺さってきていた。

「み、見ないで、見ないで」

大陰唇を引っ張られていてもなお、貞女の肉びらはなかばその扉を閉ざしたままだった。わずかにほころんでその中身を覗かせてはいるものの、すでに一度のぼりつめて汁をまみれさせているのが嘘のような緊張ぶりを示している。まるで持ち主の拒絶の意志をそのままあらわしているかのように。

「よく見えんのだが。加藤さん、もっと拡げてくださらんと」

「よっしゃ」

次の瞬間、無防備な股間が直接部屋の空気に触れた。

中年男ふたりが揃って生唾を飲みこむ音がはつきりと聞こえた。

（い、いやあ……ッ）

あじさいの花びらそっくりの淡いむらさきに色づいた肉びらが強引にめくり返されていた。美貴子の肉粘膜は小陰唇よりもさらに細かい微細なひだが幾重にも折り重なって複雑なかたちの層を形成していた。視線を浴びただけでもまた、ひとつひとつの皺ひだはぼつてりと熱を孕んで悩ましい人妻臭を立ちのぼらせていた。肥満中年の太い指がそれを強引にかきわけて膣口を暴き出す。

二十六歳の人妻の果肉の奥はいまだに少女のような淡くて甘いぬらぬらとしたピンク色を保っており、その上で全体が生汗にまみれたかのように濡れ光って中年男たちの眼を魅せてしまっていた。さらに美貴子の場合のはかつての処女膜の名残りがそのまま膣の管の内がわに輪生していて、ここでもまたいりくんだ肉層を形成している。

「お、奥さん、なんか具だくさんで……すごい気持ちよさそうじゃないか」

「それに桜木さんの奥さんのこの発達した敏感そうなクリトリス……」

人並みよりも大きな体積と態度を持つ肉真珠はすでにここまでに受けた刺激によつ

て莢をおしのけてはつきりと露出していた。顔を近づけた肥満中年の鼻息がかかるだけで突出した感応度をそなえたその張りつめた表面はわなわなとふるえ――。

（あ、ああ……ダメッ）

そのすぐ下の粘膜層が新たな熱い粘液をとろり、と吐き出す。指でつままれているだけでもそれもまた刺激になってしまい、肉びらは充血していつそうの赤みとぼつとりとした厚みを帯びてきており、同時に左右に勝手にほころんできてもいた。ぷりつとした桃色の果肉層がよりあらわになり、気品をたたえながらも同時に湯気をあげるようにもうもうと性臭をたちこめさせている。

「み、見ないで」

「この前の神社でもそうだったんだが……奥さんの身体を見るだけでわしのせがれは硬くなってきやがるんだよな。わしがこんな風になるのは、奥さんだけなんだぜ」
言いながら不動産屋が美貴子の真後ろに回った。

肌に肌が密着してきた。

（い、いや……こんなところで、こんな人に、乱暴されるなんて！）

美貴子はまた暴れようとした。だがビニール紐の拘束力は思いのほかに強靱だった。股を閉じあわせようとしてもそれがかなわない。狼狽のあまり無意味とわかりつつは

げしく頭を揺さぶっても、後ろから艶やかな髪をふたたび握りしめられてしまっただけ。

「だ、誰かッ！ 誰か——」

叫びはしかし中途でとぎれた。

亀頭とおぼしき硬いものが触れてきた。

湿り気を帯びた粘膜がひくつとふるえおののいた。

それを無視するようにして——。

「奥さん……ほおらッ」

抵抗感に打ち勝って凶暴な肉棒が無理やり分け入ってきた。

「あ、あ、あ——痛っ、うう、痛……い」

ひさしぶりに異性を受け入れる肉粘膜は持ち主に痛みをもたらしていた。うつと喉の奥から噴きあがつてきた苦鳴が救いを求める声をさまたげてしまった。逃れようとしても身体はカウンター机におしつけられている。もがきがおさえこまれ、それが悶えにも似た肢体のわななきに変わってしまう。後ろから肥満体がぐいぐいと体重をかけてきている。狭まったまま内部ではうねりをつくっている肉輪を強引に割り裂かれるのは身体に鉋か棍棒を埋めこまれていくようなつらさがあった。そして完全に埋

まりきった傘がさらに勢いをつけて、重なりあっている粘膜ひだを強引におしこむように奥にズブリと入りこんできたときに――。

「ひい――ッ」

カウンターと中年男に挟まれたままで細い腰から背中にかけてが弓のように反った。不潔で太った中年男に無理やり犯されているという被征服感が若さと高雅さを持った人妻のところに軋みを与えていた。精神のショックが大きくて、しばらくは肉体の受けている感覚は神経にまでつたわってこなかった。ジンジンと熱をとまった刺激が膣粘膜から体内の五臓六腑に痺れをもたらし、美貴子が首や肩や腰をきりきりとうごめかせ始めたのは剛直が埋まりきってからだった。

「ひい……いや、いやだ、いや」

「いやつたつて奥さん、もう、は、入っちまったんだぜ、今さらつべこべ――」

言いかけた不動産屋が突然眼を丸くして、うおっとうなった。あごを天井に向けグツと歯を食い縛ったまま数秒間動きを止めていた。それからフウーッと息を吐いた。

「うそだろ、おい……こぼすところだったぜ。まだ挿れてから三十秒も経ってねえつてのによ」

「そんなにすごいですか、加藤さん」

眼をギラギラさせた文房具屋がビニール紐を引っ張って新たに結び目をこしらえながら不動産屋に尋ねると、太った陵辱者は、すごいなんでもんじゃないぜこりゃ、と感想を洩らした。

「このところ朝晩あの写真を見ながらガキのころみたいに抜いてたからよかったようなものの、そうでなかったらこの前の神社のときみたいに、ろくに愉しまないうちに出しちまってたところだ」

言いながら動かし始める。

（あ、ああ……いや！）

いりくんだ粘膜層を無理やり奥におしこむように猛った肉棒を咥えこませてくるかと思うと、びっちりとした密着を味わうようにゆっくりと引き抜いてはその摩擦感を味わいだした。やがて静かにしかし確実に、くっちゃり、くっちゃりという中年野獣の亀頭粘膜と人妻教師の媚粘膜との擦過音が響き始めた。

（あ、ああ……わたし、乱暴されている——け、けがされて、いる……ッ）

ことばを発しようとして開きかけていた口から、しかし、もはやことばらしいことばは出なくなっていた。やめてください、と言おうとした。誰かたすけてと叫ぼうともした。扉やガラスや壁を一枚隔てただけの表通りに救いを求める声は届くだろうと思っ

た。だが大声などは出てはくれなかった。ぱくぱくとくちびるがむなく何回か動いただけ。

（あ、ああ……いや、えぐられ、て、いる——ッ）

身体が相手に馴れていないせい。こころを許してはいない相手だからか。動かされるたびにまるで粘膜のどこかを裂かれてでもいるかのような痛みを感じた。

それにくわえて秘肉を蹂躪されている圧迫感には圧倒的なものがあつた。肺も胃も重い空気がいっぱい詰まった感じで息が苦しくなっており、拒絶の意志をつたえることすらままならない。

（こ、こんなけだもののものを受け入れてしまっているなんて……受け入れさせられているなんて）

は、はあ、は、はあ、と苦しげに息をつなげるだけでせいっぱいの美貴子の様子を後ろから眺めながら、不動産屋は得意気な声で話しかけてきた。

「どうしたい、奥さん。声出しゃあいいじゃねえか。親切な奴が外を通りかかったすけに来てくれるかもしれないよなあ。いいから声出してみろよ。強姦されてますってな。どうしたい、奥さん？ うへへへ」

（く……）

肥満中年の態度が癪にさわって美貴子は顔をしかめた。それからなんとか息を吸いこみ、救いを求める声を出そうとした――が。

やはりばくばくと口が数度動いただけだった。どうしても声は出せなかった。

（こんなところを見られてしまったら。噂が学校にまでひろまってしまったら。今のこんな姿なんて誰にも見られたくはない！）

そう考えると喉元まで出かかったことはまた身体の奥へ戻っていつてしまう。

熱く豊かな肉体を持った二十六歳の人妻のこのろの内がわを読みとったかのように、肥満体の不動産屋はせせら笑ってことばをつづけた。

「そうだよなあ、奥さん。うへへ。こんなところ、見られたかあねえよなあ。だいたいなあ、奥さんを女冥利のいい気分にさせてやったのは、むしろなんだからな。さっきみたいないい思い、旦那相手にしたことなんかなかったんだろ？ うへへへ」

（ゆ、許せない。こんな男許せない）

美貴子の瞳がこれまでの人生で一度も灯らなかつたほどの強い闘志の光で輝いた。だが。

「うっう、ああ」

口からこぼれたのはそれとは正反対の弱々しい呻き声だった。肥満中年はテクニッ

クを繰り出し始めた。絶大な圧迫感と被挿入感にくわえてはげしい摩擦を受けることで粘膜腔のひだが引き攣れたような痺れがあった。背中を爬虫類に這い回られているようなちくちくとした嫌悪感が新たに束となって潔癖な人妻教師の中に湧きあがってきてもいた。身体だけでなくこころまで肥満中年に土足で踏みにじられているような気がする。

抗議の声をあげようとして顔を少し横に向け、眉をひそめたまま瞳を開いた。すると眼の前では――。

（い、いやっ！）

瘦身の文具店主が小型のビデオカメラを構えている。撮影されている。

「ああ、なにを」

「いい顔ですよ。桜木さんの奥さん」

クククと笑いながらレンズ部分をまっすぐ美貴子の瞳に向けてくる。顔をそむけると文房具屋はビデオカメラを向けたままカウンターの向こうがわに回って人妻教師の表情を逃すまいとするのである。美貴子がまた逆がわに顔を向けると今度はカメラのレンズは人妻と肥満中年の結合部を撮り始めた。ゆっくりと上を向いて人妻の胸元や首すじをアップで捉え、ふたたび顔を撮りにかかってくる。

「いや、映さないで……」

「別にいいじゃないですか。桜木さんの奥さんの汗まみれの美しい顔を永遠に残しておきたいだけです。紐だってちゃんと映ってますし、無理強いされてるのが明白なレイプ映像ですよ、誰が見たって。仮に桜木さんの目にとまったとしても、不倫してるだなんて誤解はされませんよ」

（か、仮につて。桜木さんの目にとまったとしても、つて）

美貴子は自分の耳を疑った。文房具屋は暗にほのめかしているのではないか。自分たちの命令をこれからもきかなければ撮影したものを美貴子の夫に見せると。

（い、いや！　いくら……いくら紐で縛られて無理やり乱暴されているっていつでもあの人以外の男なんかと身体をつ、つなげてしまっているところを、もしあの人に見られてしまったら。これを知られてしまったら……）

「だ、だめ。映さないで」

やさしい夫のことだ。被害者である妻をいたわってはくれるだろう。相手に怒りも抱くだろう。だがそれでどうなるだろうか。夫のこのろの中に自分の身を守ることもできない妻への侮蔑の気持ちは起こらないだろうか。事件以前とまったく変わらない生活をつづけることができるだろうか。暴漢に乱暴された妻の存在自体を恥だと感じ

るようになりはしないだろうか。夫から品性を疑われるのは加害者だけにとどまらず被害者である自分も含まれてしまうのではないだろうか。

（い、いやだ。だめだわ、そんなの）

本気で抵抗すればレイプなんてされるわけがないとあの人が考えていたら。わたしのことを簡単に他の男に身体を許すようなあさましい女だと思われてしまったら。

夫のことを持ち出されたことで動揺がいつそう増した人妻をさらに襲ったものがあった。

（あ、あ、あ、なに——わたし……？）

きめの細かい白い肌はまたふたたびどつと汗を噴き出させて濡れていた。先ほど、按摩器で責められたときはまだ顔が中心だった。しかし今はもう全身がねっとりとした人妻汗で濡れそぼっていた。半分脱げかけたパーカーの下のカットソーの生地は女らしい丸みを帯びた肩やなめらかな背中を透かして野獣たちの眼を愉しませてしまっていた。目元はぼうつと紅潮し、剥き出しの太もももまた汗にまみれ、股間や腋の下や膝の裏や足指の股などもはつきりと匂いを放っている。

（う、うそ、こんな人なんか、わたし、また……）

「どうしたんですか、桜木さんの奥さん。その顔は？ まさか感じてるんじゃないで



しょうねえ。奥さんは毅然としていればいいんですよ？ そんなわけありませんよねえ。弟さんの借金のカタとして加藤さんにいやいや暴行されているだけなんですからねえ」

仮にこの映像を桜木さんに見られるようなことになっても、奥さんは感じたりなんてしなればそれで言い訳は立つでしょう——陰險な文房具屋はレンズをまっすぐ美貴子の顔に向けながらそう言う。豊かな情感を持った主婦の肉体が感じ始めていることを見越しているのがあきらかな、嘲弄の混ざった口ぶりだ。

「レイプされている奥さんが、感じ始めるわけなんてありませんよねえ。気高くて貞淑で夫想いの奥さんが、そんなことになるわけなんですよねえ。おやおや、どうしたんですか。顔が真っ赤ですよ。汗もものすごい。くちびるを嚙んだりして……どうしたんです、いったい？ それに——泣いてるんですか？」

「あ……は、あ——あ」

もはや口答えすら満足にできない。それくらい、ひさしぶりに受け入れる男性の感触には絶大なものがあつた。しかもスキンは未使用——。

（あ、ああ——こんな）

夫があと何年かで海外出張のなくなる職制に昇進する見通しがあつたのでそれまで

は美貴子は聖職をつづけ子どもはつくらない予定だった。それでふだんから用心の意味とエチケット的な意味でスキンを用いるのが常だった。だからこそ粘膜がじかに感じる男性の亀頭粘膜やエラの感触にはおぞましき以上に美貴子の身体の奥底をぐらぐらと揺さぶってくる強靱なものがあつた。

（いやっ。す、すごすぎるのが。わたし、わたし）

按摩器責めでのぼりつめた直後の肢体でふたたび炎が燃えさかっているのがわかつた。腰のあたりがとくに熱かつた。じつくりと摩擦を受けるたびに人妻教師の喉からは、うん、と呻き声がこぼれるようになった。泣き声混じりの呻き声――。

「おい、なんだ、奥さん。早すぎるだろ？ イキそうなのか？ がっかりさせないでくれよ。貞淑な奥さんのことだから我慢できるだろうが。うへへ」

肥満中年は角度を変えて擦りたててくるかと思うと、深く埋めこんだままで自分の腰を緩やかにグラインドさせてくる。かと思うと不意打ちのように引き戻してからまたピッチを変えた抽送を行ってくる。数分で果ててしまう夫からは味わったことのないぴりぴりとした愉悅の波が容赦なく脊髄を溶かし、脳を灼きにかかってくる。初めて交わった相手なのに早くも肥満中年の凶器に馴染んでしまったかのように、美貴子の粘膜は弱々しいながらもうねりを示して相手を迎え入れ、からみついていた。それ

はこころよりも先に美貴子の肉体が屈服したあかしかもしれない。

（い、いや、わたし、いやよ、こんな奴なんかで……）

感じたことはない。

そう思えども。

「どうしたんですか、桜木さんの奥さん。ぜんぶ映ってますよ。今の奥さんの顔を桜木さんが見たらどう思うんでしょうねえ……ククク」

（映さないで……映さないで！ 違う！ わたしはいやなのに——いやなのに！）

不動産屋の言う通りだと思った。早すぎる。が——いくまいとくちびるを引き結んでも湧きあがってきた強烈な快感が美貴子にすべてを忘れさせようとしていた。ひっぴつと洩れる呻きには愉悅がたつぷりと入りこんでしまっていた。

（あ、あなた……違うんです、わたしは、違う、違うんです）

かろうじて意識の端に貼りついた自意識はそう叫んではいた。しかし二十六歳の女性の底に潜んでいた熱烈な性欲はあつという間にそんなものは吹き飛ばしていた。もともと美貴子は夫との褥しとねでもはげしく声をたてる方ではなかった。感じたときでも閉じたくちびるの中で呻き声を殺すことがほとんどだった。ましてやイクなどということばをはっきり夫に向かって発したことはなかった。だが——今。

「ああ、いや、違う、違うのに、い——い、い」

「い、何なんだ、奥さん？ ククク」

（だ、ダメ。わたし。い——）

かたちのいい鼻梁から目元までがもう真っ赤だった。カウンターにおしつけられたままの胴が、腰が、悩ましくうねった。剥き出しの太ももがなくなるとふるえた。絶頂の予感にこころはざわめき、相手の肉棒にからみついていて、微細なひだが一斉にうごめいた。持ち主の意志に反して美貴子の熱い肉びらは相手に寄り添い、びっちりとき従ってしまっている。そして子宮に閃光みたいな鋭い痺れがやって来た。

「う」

不意打ちに近い突きを受けた。汗が玉となってずくずくと噴き出した。自尊心という名のヒューズが脳内で焼き切れ、理性ではとうてい抑えきれない声が喉を裂いた。

「うあああ、いくッ！」

叫んだのと——。

同時だった。お届けものですよという声とともに入り口の扉が開いて、宅配便の配達人が入ってきた。軟体生物と化した濡れた膣の持ち主——美貴子がちょうど濃い絶頂に貫かれ始めた瞬間だった。

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行

株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

<http://ktcom.jp/>

http://ktcom.jp/index2.htm

KTC - KILL TIME COMMUNICATION...

おかげ様で46期!

国内最大級のダウンロードショップ! ゲームのダウンロード販売はここからどうぞ!

ほしいものちょっとつかも...

会社概要 通販ご利用方法 広告掲載案内 お問い合わせ プライバシーポリシー

キルタイムコミュニケーション オフィシャルサイト

http://ktcom.jp/

コミックアンリアル
コミックアンリアル
アンリアル
検索

- ◎雑誌、コミック、小説の**通信販売**もやってるよ!
- ◎二次元ドリームマガジン・コミックアンリアル**のバックナンバー**も買えるよ!
- ◎**ジャンル別**で作品も選べて超便利! 来かねる場合がございます。場合、お手数ですが再度お問い合わせください。
- ◎二次元編集部**の愉快なBlog**も更新中!

最新情報満載!
最新情報満載!!
フルテキストライトはこちら!
ゲーム化!
ダウンロード

Valkyrie



http://www.comic-alkyrie.com/

cranberry



http://www.cran-berry.com/

mille-feuille
ミルフィーユ



http://www.mille-feuille.jp/

**モバイル二次元
ドリーム**



http://www.2d-dream.jp/



KTCの戦うヒロインオンリー漫画雑誌! 18禁ではないからこそ表現できるドキドキがある!!

二次元ドリームノベルズがアニメにも進出! 新生ブランド・クランベリーをよろしく!!

二次元ドリームノベルズから生まれた美少女ゲーム! 「ミルフィーユ」ブランドにて続々登場!

二次元ドリームノベルズが携帯電話で読める! 携帯サイト限定の書き下ろし小説もあるよ!